

---

# HAPPY LIFE

宮凪 りんご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HAPPY LIFE

### 【Zマーク】

Z5634A

### 【作者名】

富岡りんぐ

### 【あらすじ】

「昨日のことさア……」「誰にも言ひてないですよーー」「なんにも聞かれてないのに答えてしまつた……」「そう。……でさ、あれは既成事実として……ん?」「付き合おつか。」「…え?」「既成事実。すでに起こってしまった、変えることができないしかなでき」と。そんな、既成事実の意味なんて聞いてない。腹黒クラスメイト×天然…?のラブコメディ。

## 第1話

「あつ、教室に体操服忘れてきた！」

「力士、遅いよ。ここまできてから『付く？』

ここは、自転車小屋。生徒玄関から出でじぱらへりして元気にある。

「…しあがない。待ってあげるから、はやくなー。」

「ありがとー！ スグ行ってきますー！ 優ひやん、メグひやんー。」

わたしは急いで教室に向かつた。

あ…

教室のドアをあけると、机につづぶして寝ている人物がいた。

田野くんだ。

席が一回横になつただけで喋つたこともないから、田野くんのこと  
はあんまり知らないんだけどね。

でもカツコイイしテストの番数は一から下に下がつたことがないし  
つていうので、かなり有名。

…起こさないようにしないと。

わたしはそつと自分の机に向かつ。

ガタガタッ

「ギャー————！」

田野くんの横を通り過ぎようとした瞬間、わたしは大きな音と声を出して何かにつまづいて転んでしまった。

その騒音に反応したのか、田野くんが顔を上げる。

「あの、『めん、起』しちゃって…。」

「————ウルサイ。」

急に制服のリボンが引っ張られた。

「…え？」

わたしは両腕をつかまれ、無理矢理キスをされてしまう。

「ん…んつー？」

引き離そうとするが、男の力には敵わなかつた。

それから数秒間、キスは続けられた。

「ふはつー。」

「…」

「な、に、す…つ」

わたしはそれ以上何も言えなかつた。

「「……」」

2人で沈黙。

わたしは自分の机まで走つて体操服を入れた袋をとり、教室から出た。

ふあーすと起き、なんですけど…。

「せ、せんせいにね。ちゅうとね……。」

田野くんにキスされてました、なんて……言えなによ…………。

「……よく分かんないけど……じゃあ帰るつか。」

わたしあはこつものよつて帰りこ3人で寄つたマックで変ごどもつま  
くつて…………

2人にものす」「一へじぶかしがられたのだつた。

明日…学校行きたくないよお…………。

どうか、田野くんに話しかけられませんように……ひーーー

「（）めん、ちゅうといい？榎本さん。」

よくなこよ、田野くん……。

今日は朝からずっと田野くんと田もあわさないよう避け続けてきたのに…つこに（ー?）休み、あちらから声をかけられてしまつ

た。

優ちちゃんとメグちゃんは、田を見開いてビックリしてころぶ。  
確かに…今までわたしと田野くんは喋ったこともないハズなのに、  
いきなり喋ってるからね…。

「こや、今は…。」

今どじろか一生ムリです。

「ほんの少しでいいんだけど…ダメ?」

「うう…じゃあ、ハイ…」

押しに負けてしまった…。(たいておそれてもないけど…)

わたしが黙つて田野くんにつっこひく。

着いた所は、誰もいない学習室だつた。

「昨日の」とやう……」

「誰にも言つてないのです……。」

なんにも聞かれてないのに答えてしまった……。

「わ、…でも、あれは既成事実として……」  
ん?

「付き合おつか。」

「…え?」

「既成事実。すでに起つてしまつて、変える」とのできないたしかなでやう」と。」

そんな、既成事実の意味なんて聞いてない。

「…」「めんなさい、むづです。」

「何が?」

や、笑顔で「何が?」と問われても…付き合ひ「と」が無理なのです  
…。

「昼休み、もつあぐ終わるな…。じゃあこれからよひじく、華苗。」

力ナエ…?

なんで、お前で呼び捨て…………？

…「れからいじくへ？なににですか？！」

わたしはチャイムがなるまで、呆然と学園内に立っていた。

## 第1話（後書き）

初投稿でした。感想等お待ちしております。

## 第2話

「華苗、帰る？」「

ザワツ…

「つえ…！？」

「何、カエ！田野くんと付き合ひことになったの！？」

「かなぢやーん、あたしそんなハナシ、聞いてないんだけどなア」

「いや、違…」「うそ、僕たち付き合ひことになったんだ。」

…はいっ！？

「……………！」

クラス騒然。

つて！

「僕…！？いま自分のことをボクって言いました…！？」学園室では「俺」でしたよね…！？

それで、「ボクタチ」って…

日野くんと、  
だれ…？

わたし！？

あ、  
ありえないっ  
！

わたしが言葉をなくして固まつていのと、田野くんはクラスのみんなににこやかに「バイバイ」とかっこつ…わたしの手をつかんで教室から引きずり出した。

わたしは...優りさんとメガちゃんと繋るの...うー

マック行くって言つてたの――――――――

「ひのくわー！」

「なに？」

「わたしと田野くん、いつのまに付き合つたのかな…？」

「…………」

質問に答えてくださいーーー！

：今、わたしは田野くんと自転車に乗っている。

田野くんは自転車通学じゃないから、何故かわたしの自転車で一人乗り。

田野くんはわたしの家と反対の方向へ自転車を進めていた。

自分の家に帰るのかな？

……わたしの自転車で。

「ついたよ。」

田野くんが自転車をとめたところは、公園だった。

「学生のバーとといえば、公園、みたいな。」

データ…？

わたしと田野くんは、付き合ひたるのですか？

ひひひ…。

「あ、オイ、華苗。」

「…は…？」

田野くん、キヤラ違ひ…。

「明日から…」「華苗ッッ」

へ…？

別の方向から声が…わたしの名前を呼んでいる。

名前を呼ばれた方向を見てみると、裕鷹が車から出てるものすごい形相でわたしたちのところに走ってきた。

あああ…。裕鷹には、裕鷹にだけは男の子と一緒にいるといひは見られちゃいけなかつたのに…！

裕鷹は、わたしの兄。

すうじいシステムで有名…らじこ。

「…」「…」「…」

「裕鷹、なんでここに？」

「大学が休みの期間だとか言つてたっけなあああ…。

「華苗が…男と自転車で一人乗りしているとの目撃証言があつて…」

「あは…誰、それ。」

「裕鷹にそんな情報を…つー！」

「ていうか、な、なに…！？」

「一人とも、ファンが見たら泣いちゃうよ…………。」

日野くんも裕鷹もファンクラブがあるほど人気があるので。

その一人が、今にも殺し合ひそうな雰囲氣で睨み合つている。

「こわい、こわすぎるつ…。

「…華苗、帰るぞ。」

「でも…自転車…。」

「明日」「イツが学校に乗つてこればいい。オレの車に乗れ。はやく。明日の朝も送つていつてやるから。」

「あー、うん…。」

裕鷹があまりにもこわい顔でせかすので、わたしは急いで車のドアを開けて車に乗り込んだ。

「おまえ、もつ華苗に近づくなよ……？」

「…………」

裕鷹一、なに言つてゐるの――！

田野くん、こわい、こわい――！――その顔はやめて一つ――！

大体、田野くんとわたしは同じクラスだし……近づかないのは無理だよーっ……！」

### 第3話

… 今日も（あたつまえだけじ）来てしました、学校…。

自転車小屋にはまだわたしの自転車はなかつた。

昨日は田野くんを一人（いや、わたしの自転車と一緒に）取り残して裕鷹の車で帰つちやつたし。

怒つてるかなあ…。

「カエー。」

「あ、優ちゃん。ねはよ！」

「おはようじやなこわよつ…ビーグーー！」とよーーー。」

「…なにが？」

意味不明発言をする優ちゃんに問掛けた瞬間、メグちゃんが勢いよくドアを開けて教室に入つてきた。

「カナちゃん、ものすつじい噂になつてゐるわよー。」

「なにが！？なんの！？

「田野くんといつ人がいるつてのに…。」

優ちゃんがわたしに向かつて呆れた風にそつと言つた。

？？日野くん？

「今日カナちゃんが、どうやって学校にきた？」

メグちゃんがニヤニヤしながらわたしに聞いてきた。

「車、だけど……」

「やっぱホントの話だつたんだ！」

ニヤニヤ笑いを深めるメグちゃん。

「力工……。」「

わざとよつ一層呆れましたといつ顔でわたしの名前を呼ぶ優ちゃん。

いやふたりとも、車で来たくらいでなに……？！

そう思つたとき、優ちゃんが「つむきながら」とことを言つてくれた…。

「すーつー」カツコイイ人の車から力工がありてきたとか。それで、そのカツコイイ人に力工が学校に入る間際『愛してるよ』とか言われてたとかって噂は、ホントだつたんだね…。」「

「えええええええつー！？」

それが【噂】！？

事実だけぢつ……

ちが‘つ、違‘つのおお……。裕鷹は兄、だし……

まさか、まさか見られていたとは……！――！

「裕鷹は……」

「えーっ！その人ゆたかって名前なの？呼び捨てえ？……つてゆうか  
あたし達、力ナちゃんから聞いてなかつたよ……その人のことも、日  
野くんのこととかも！」

「友達でしょ？言ひてくれればよかつたのに。」

「いや……」

相談もなにも……。

うわあ、こんがらがつてきたあ……。

「一股なんてヤルわね、力ナちゃん……でも今日のド田野くんの方  
に一股バレちゃつたんじやない？」

……一股もなにも、田野くんとも付き合つてないような……。いや、付  
き合つてゐるのか！？

「でも、一股はよくないわよ。ちやんとビビりちかに決めなきや……つ、  
あ。」

優ちゃんがわたしの後ろの方を見て、固まつた。

メグちゃんもその方向を見る。すると、優ちゃんが回りついて固まってしまった。

「メグちゃん、優ちゃん…？」

…嫌な予感。

「おまよつ立花さん、林さん、…華苗」

立花さんはメグちゃんの姉妹、林さんは優ちゃんの姉妹…。で、この学校でわたしを『華苗』なんて呼ぶ人は……

わたしは勇氣を振り絞って、後ろを見た。

「田…野、くん。」

セリフは、いやどこか照れ笑いに附いた田野くんがいた。

「わーーーー！」

「うよつと、いい？」

…田野くんがわたしを『うよつと…』とこいつ呼び出すときも、いじりがあるとは思えない。

「うよ、なに？」でも…？

…なら他の人もいるし、安全だし…？…

「いや、いいじゃなんだし……学園祭、行こうか。」

うわあ、笑顔、四割増してくるよ……。

…逆らわない方が身のためかもしけない…。

わたしは優ちゃんとメグちゃんに力無く微笑んで、日野くんの後にしてボトボトイていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5634a/>

---

HAPPY LIFE

2010年10月19日02時29分発行